

ササク族の格闘技プリセアン

石井浩一¹⁾

Perisean as the fighting sports of the Sasaks

Hirokazu Ishii¹

Key words : Sasak, Perisean, faith, acculturation

**(Bulletin of Department of Physical Education, Faculty of Education,
Ehime University, 6, 57-63, March, 2009)**

キーワード：ササク、プリセアン、信仰、変容

I はじめに

本稿は、インドネシアの、主にロンボク島に居住するササク族の格闘技プリセアン(Fig. 1)の現状について述べるものである。

プリセアンとは、男性2人が互いに左手に防御用の盾エンデ(Ende)、右手に攻撃用の棒ブンジャリン(Penjalín)を持って打撃しあう武器格闘技のササク語名称¹⁾である。プリセアンはロンボク島の全域に渡って行われており、ササク族の男たちはこの格闘技を大変好む。初めてプリセアンを見た人(特に女性)は、何とむごいゲームと思うかもしれない。双方の選手は互いに渾身の力を込めて、相手の肉体にロタン(棕櫚)の棒を打ちつけるからだ。ロタンの棒すなわちブンジャリンの攻撃によって、体には痛ましい打撃痕が残る。また、もしロタンの先端が頭に命中したら流血となり、そのゲームはとても恐ろしいものになる。しかし、ササク人はしばしばそんなゲームを観ているので、流血しても、それはちょうどボクシングと似たようなもので、ごく普通のことのように感じている。

プリセアンについては、これまで英語文献では主に観光本(Pickell, 1997)、インターネット、インド

ネシア語文献では教育文化省刊行の報告書(Agung, 1980/1981. Ahumad, 1979/1980. Tim Sri, 1988)が若干ある。しかし、文化人類学およびスポーツ人類学では未だ研究はされていない。

そこで筆者は、未だ知られざるプリセアンの実態をまず明らかにしようと考えた。調査は2000年8月14日～21日に4つの集落²⁾で行ったが、期間が短く、とてもこの調査だけでは足りない。したがって、本論の叙述に当たっては、筆者がインドネシア国内で収集した前記の報告書に多く依拠しているが、本文中特に注記を付していない箇所は、筆者の聞き取り情報に拠るものである。

調査がまだ予備調査の段階で稿を起すのは恐縮であるが、本稿になにがしかの価値を見いだすとすなわち、プリセアン研究のプロローグとして、まずはその全体像を開陳すること、この点に尽きると考える。

II ロンボク島およびササク族

次に、ロンボク島およびササク族について簡単に説明しておこう。ロンボク島はバリ島の東隣に位置する島で、西ヌサ・トゥンガラ州(ロンボク島とスンバウ島で構成³⁾)に属する。バリ島との間のロンボク海峡には、アジアとオセアニアの生物分布境

1) 愛媛大学教育学部
〒790-8577 愛媛県松山市文京町3番

1. Faculty of Education, Ehime University,
Bunkyo-cho 3, Matsuyama-shi, Ehime, 〒790-8577,
Japan

界線「ウォーレス線」が走っている。ロンボク島の面積は 4990 km²、人口約 270 万人。ロンボク島は、1740 年にバリのカランアスム王国^{注 4)}の支配下に入り、多くのバリ人が西ロンボクへ移住した。1843 年にはオランダの支配下に入ったが、その後島内は混乱し、それを治めるため、オランダ政庁は 1894 年に武力介入を行い、全島を政庁直轄とした歴史を持つ(石井米雄, 1994)。

島の住民は主としてササク族とバリ族で、西部にはバリ島から移ってきたヒンドゥー教徒のバリ族が多く居住し、全人口の 10%を、中・東部にはイスラムのササク族が居住し、全人口の 85%を占める。他はキリスト教徒、仏教徒等である。ササク族は、主として宗教的相違により、文化的にウェトゥ・リマ(Wetu lima)、ウェトゥ・トゥルー(Wetu telu)、ブダ(Budha)の 3 グループに分けられる。ウェトゥ・リマは純イスラムといわれ、正統イスラーム教義を忠実に遵守するグループ。ウェトゥ・トゥルーは土着信仰とイスラームとの習合宗教を守ってきたグループ。ブダはイスラームを受容しなかったササク族で、ロンボク島北西部および南西部の一部のみ居住し、一般的にはロンボク島の原住民といわれているグループである。大部分のササクはウェトゥ・リマであり、ウェトゥ・トゥルーは 1965 年以降半ば強制的にイスラームに改宗させられてきたこともあって、北部や南部、東部の辺境地帯に残存するのみである(綾部, 2000)。

社会は上位貴族、下位貴族、平民の 3 階層から成り、敬語や敬称語によって識別される。ロンボク島は、インドネシアが独立してからもバリ族とササク族の特権階級によって統治され、西ヌサ・トゥンガラ州が成立してからも依然として最貧状態が続いた。しかし、1970 年代に政府がようやく救援政策を打ち出し、1980 年代からは「第 2 のバリ」を目指して観光開発が進められている。^{注 5)}

一方、島の農業は灌漑水田が浸透し、米の二期作が中心であるが、南部は低い丘陵地となっており、雨期(11 月～4 月)の水田が頼りである。ブダや山間地帯では焼畑による米作も行われている。その他、陸稲、トウモロコシ、キャッサバ、ニンニク、タバコが栽培されている(石井米雄, 1994)。

長い乾期が続いて、雨がほしい時、ササク族の男たちはエンデとブンジャリンを持って闘った。しかし、なぜ雨乞いで格闘技なのか、それは、ササク族の信仰をひもとくことによってわかってくる。



Fig.1 プリセアン(筆者撮影)

III プリセアンと信仰

インドネシアの民族スポーツには多かれ少なかれ、土着信仰との関連性が確認される。これは、筆者が 1997 年から今日まで断続的にインドネシア各地の民族スポーツの調査を行う中で、確認できたことである。プリセアンも例外ではない。プリセアンは信仰と関係がある。信仰すなわち精神文化の観点からすると、プリセアンはイスラームの文化でも、ヒンドゥーの文化でもない。では、いつの、何の文化なのか。それは、すなわちプレ・ヒンドゥーの文化であり、アニミズムとディナミズムといわれる。こうした信仰を元に、プリセアンは超自然的力を試すために機能するといわれてきた。

ササクの男たちは、長い乾期が続き、雨がほしい時にプリセアンを行った。つまり、雨乞い儀礼としてプリセアンを行った。場所は決まって田である。雨を最も望む田がプリセアンの競技場になるのだ。エンデとブンジャリンを従えた男 2 人が対峙し、プリセアンが始まる。激しい打撃の応酬。選手が流血する。流血する選手が多ければ多いほど、血がたくさん流れる。流れた血を、神が雨水で洗い流すと信じた。

プリセアンに関する信仰はもう一つある。それは「力(Kekuatan)」を信じることである。この「力」というのは、知識の総体として認識されており、一般的に 2 つある。一つは、東方に起源を持つマスリキ(Masriki)学である。これは、マントラ(呪文)を信じ、呪力の宿った、植物の一部から作られるブバドン(Bebadong)あるいはジマツ(Jimat)と呼ばれる呪力の宿った御守り、また油、骨、石(小

瓶や袋に入れて携帯する)は人間に超自然的力を与え、相手の力を衰退させるというものである。

もう一つは、アラブ圏に起源を持つマリービ(Mahribi)学である。これは、アラビア語で書かれた呪文、イスラームの聖典コーランの章、病気よけの呪文をしたためた書き物、これらを信ずることである。プリセアンにはこうした信仰的基盤が確認されるのである(Ahmad, 1979/1980)。

IV プリセアンの実際

IV-1 プリセアンの装備

ここでは、まずプリセアンが成立するために不可欠な装備—エンデ、ブンジャリン、ガムラン(Gamelan)について説明しておく。

IV-1-1 エンデ

防御用の盾をエンデといい、竹製の外枠にヤギの革を張り、ロタンの紐で結びつける。エンデの下側が膝をカバーし、上側が頭をカバーする大きさで、縦約 1m、横 75cm。裏には木材から作られた把手を付ける。現在は四角形だが、より古い形は円形であった。

IV-1-2 ブンジャリン

攻撃用の棒はブンジャリンといい、ロタンから作られる。ロタンはどれでもよいわけではなく、十分に成長したものをを用いる。十分に成長したものでないと、強度に問題があるからだ。長さは約 1m。ロタンをブンジャリンというスポーツ用具にするためには、簡単に割れたり裂けたりしないように、まず燻す作業から入る。このときに、ときどき蜂蜜をふりかけることも行われるという。ロタンの先端、中間部、根本の部分は、イジュックと呼ばれる棕櫚の繊維あるいは糸を用いて 10cm 幅に巻き付ける。これでロタンはよりしっかりしたものになり、攻撃用の武器としてのブンジャリンの完成となる。古くは、今日のものより遙かに危険な用具が使われていたという。それは、先端をブリキで幾重にも覆ったブンジャリン・ブドゥンポック(Penjal in bedempok)といわれる(Ahmad, 1979/1980)。

IV-1-3 ガムラン

ガムランとは楽団のことで、民族スポーツのみならず、様々な儀礼において欠くことのできないものである。したがって、ガムランの伴奏なしにプリセアンが行われることはない。インドネシアの民族スポーツにみられる特徴(管見によれば、おそらくインドネシアのみではないが)は、必ずガムランが奏

でられ、その調べに乗ってスポーツが始まるということである。筆者が 2005 年 8 月 26 日～28 日に参加観察したインドネシア伝統スポーツフェスティバルでは、スポーツの実演のみならずガムランも採点の対象になっていた^{註9)}。



Fig.2 ガムラン・プリセアン (筆者撮影)

それほどまでに、ガムランの価値および位置づけは高く、スポーツ文化を構成する上で不可欠な要素になっているのである。

プリセアンの時のガムランは、ガムラン・プリセアンまたはグندان・プリセアン(Gendan perisean)という。グندانとはいわゆるドラムのことで、ガムランの「主役」がグندانであることから、こう呼ばれる。ガムラン・プリセアンは大がかりな楽器をそろえる必要はなく、ごく簡素なもので十分である。普通は、主役のグندانが 2 個で一对、リンチック(Rincik) 1 個、そしてゴン(Gong) 1 個の、いずれも打楽器で構成されるが、時にはスリン(Suling)とペトゥック(Petuk)が加わることもある(Tim Sri, 1988)。

IV-2 プリセアン・ゲームの様態

次に、プリセアン・ゲームはいつ、どこで、だれが、どのように行うのかについてみていこう。

プリセアンは上位貴族、下位貴族、平民の 3 階層で違いはない。プリセアンが行われる時間は、ほぼ午後 3 時から 6 時までで、それ以外の時間に行われることは、まずない。それは、おそらくプリセアンに関わる人々のほとんどが農業従事者で、この時間しか取れないからだと思われる。

プリセアンは先述したように、雨乞い儀礼として伝承されてきた。しかし、時代を経て娯楽の要素が大きくなってきた。すなわち、近年プリセアンは乾期のみならず、イスラームの重要な祝日あるいはその他の国民の祝日に、雨乞いとは関係なく行われる

ようになっているのである。したがって、場所は田でなくてもよく、どこか空き地があれば、そこが競技場となる。

競技場には、まず初めにガムランの一行が入り、ガムラン・プリセアンの調べが競技場に鳴り響く。この意味は、観衆および選手候補者を競技場に招き入れ、高揚させるためである。ほどなくして、方々から人が集まり初め、観衆と選手候補者による人垣ができたなら、プクンバルと呼ばれる男2人がプリセアンを行うための準備に入る。プクンバルとは、いわばプリセアンの世話人であり、プロモーター、セコンド、また呪術者としての役割をも担う。

彼らは、まず競技場にできた人垣のかたまりを4つの地域：ラウエン・ラウク (Raweng lauk)、ダヤ (Daya)、ティムク (Timuk)、バレット (Baret) に分ける。それぞれの意味は、南、北、東、西である。これら4つの地域は、より小さいコーナー：ブチュ・ラウク (Bucu lauk)、ブチュ・ダヤ (Bucu daya)、ブチュ・ティムク (Bucu timuk)、ブチュ・バレット (Bucu baret) に分けられる。それぞれの意味は、南コーナー、北コーナー、東コーナー、西コーナーである。各地域・コーナーは互いに向きあう形になる。選手はその日どの地域・コーナーに陣取って出場するか、自分にとって縁起のよい方角を選んで陣取るのである。例えば、今日東コーナーから出たら、次回別の日は違うコーナーから出るという具合である (Ahmad, 1979/1980)。

競技場の地域・コーナーが整ったら、プクンバルの2人は「挑む」を意味するグンバン (Ngumbang) を始める。2人のプクンバルはエンデを頭上に掲げ、ブンジャリンを少し高く挙げて動かすゲチョック (Ngecok) と呼ばれる動きを伴ったダンスをする。このダンスが終わると、双方のプクンバルは競技場中央に歩み寄り、エンデとブンジャリンを持って対峙する。次に、エンデを頭上に構え、ブンジャリンで互いに相手のエンデを一回ずつ打ち合せて、エンデとブンジャリンを地面に置く。この一連のグンバンは、プリセアンを象徴的に表したもので、いわば実践に入る前のセレモニーである。

グンバンが終了すると、双方のプクンバルは、観衆の中からムタンディン (Metanding) と呼ばれる選手候補者を探す。プクンバルの重要な務めとしてはっきり言えることは、「2 つとも同じ」を意味する kembar から派生したングムバラ (Ngembarang) である。ングムバラとはどういうことかという、対戦する選手を決める過程においてつり合いを図ると

いうことと、ゲームが進行している間、双方の選手を見守るという意味が含まれている。これは、プリセアンが簡素な伝統的社会において伝承されてきたことを考えると、うまく合った方法といえる。

選手探しが始まると、メロディーはグンディン・プンガルス (Gending pengalus) に変わり、選手を探している間奏でられる。相手を誰かにするかは選択は、ナンディンガン (Nandingan) といい、普通は年齢、体格、人気によって決まるが、ほぼ同等の力を持つ選手の場合は年齢、体格を問わず、断ることはできない。もし選手候補者の一方が最初に合図して相手と合意したら、その選手は地面にエンデを投げる。これをティンパック・エンデ (Timpak ende) という。もしその選手に闘う意志がなく、合意しなかったら、自分が立っている場所でエンデを裏返す。これをバリック・エンデ (Balik ende) という。それは、合図のやり直しと、他の相手を捜すことを意味する。もし、目当ての相手があまり乗り気でないなら、挑戦者は別の相手を捜すことになる。

互いに闘う意志が一致したら、それをパユ (Payu) という。この時点から選手が準備している間、グンディン・プマパック (Gending pemapak) の伴奏が変わる。パユの後、両者は上着を脱いで準備に入る。プリセアンの選手は上半身に何も身につけてはならない。ただし、頭は別である。サブツ (Sapuk) という頭巾で頭を覆ってもよい。その主たる用途は、先に述べたように、プバドンあるいはジマツトという御守りをしのぼせるためである。それらは、それぞれ異なる方法、所作で、プクンバルとともに施される。ある者は、座ったまま呪文を唱えたり、ある者はキンマの薬を噛んだり、たばこを吸ったり。またある者は地面を足でつつきながら歩き回る。

双方準備が整ったら、プクンバルの一人は2本のブンジャリンを選手の方に放り投げる。選手は、急いでどちらか良い方のブンジャリンを取らなければならない。ブンジャリンを手にした選手たちは、不正行為等についてプクンバルから短い忠告を受ける。それが終わると、選手は競技場中央へ歩み出る。双方エンデとブンジャリンを差し上げたら、ワシット (Wasit) と呼ばれる審判の合図で、第1ラウンド開始。今日、審判の役割はより明白で、それはホイッスルによって与えられる。彼はホイッスルでゲームを制止し、どちらが勝ったか負けたかを判断する権限を持っている。

ガムランのメロディーは力強いグンディン・プマック (Gending pemangkep) に変わる。選手は相手と

の間合いとタイミングを図りながら、ありったけの力を込めてブンジャリンを打ちつける。

プリセアンの選手によると、彼らはブンジャリンが皮膚を直撃しても何も感じない。彼らはゲームが終わって、夜眠りにつく頃に痛みを感じるという。

打撃の応酬は、ガムラン・プリセアンの奏でる音に呼応するかのようになり、繰り返される。ガムランの調べ、歓声。これらが選手を勇気づける支援とな

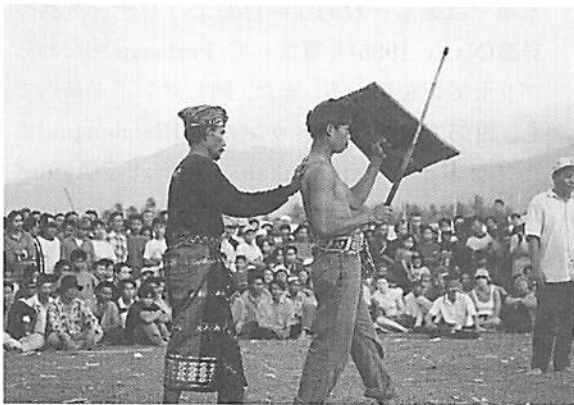


Fig.3 呪術を施すブクンバル (筆者撮影)

る。ゲームの進行は、ボクシングと似ているが、ゲームの調整や判定はワシットとブクンバル三者の協力体制で行われる。また、選手は不測の事態が起きたときに、自ら意思表示して、ゲームを一時中断することが認められている。例えば、自分が倒されたり、押されたり、あるいはエンデ、ブンジャリンの両方あるいは一方が手から放れてしまった場合、またはサブが取れてしまった場合にはチョップ(Cop)と言う。また次の場合は、ブクンバルがゲームを一時中断する。それは、双方のプレイヤーが接近戦でもみ合いになること。すなわち、ボクシングでいうクリンチになった場合である。

第1ラウンドが終了すると、スタルンガン(Setarungan)といい、どちらか一方の選手が降参しない限り、次のラウンドに進む。また、ブクンバルは、選手のどちらかが流血したらゲームを止める。すなわち、プリセアンはラウンド制をとってはいるが、ボクシングのようにラウンド数が決まっているわけではなく、降参するか、互いに力尽きるか、流血したらゲーム終了となるのである。

打撃が認められているのは上半身のみで、腰から下への打撃は禁止されている。中でも頭部をねらう

打撃が最も多い。なぜかという、最も流血しやすい(期待できる)部位だからである。それは、同時に勝利に結びつく打撃である。ブンジャリンには、打撃が観衆から見てわかりやすいように、ブンジャリンの先の方に印が付けられる。これは、ビレット(Bilet)またはバラル(Balar)と呼ばれ、普通は赤か濃い赤あるいは青みがかかった色の印である。

選手は、チュルット(Celut)と言う反則や相手を欺く打撃をしてはいけない。ルールブックがあるわけではないが、不文律としておおよそ次の事項がある。

○腰から下への打撃

○ングルジャク(Ngerujak)：エンデとブンジャリンを相手に向けてそのまま体当たりすること。

○相手が Cop つまり「参った」と言っているにもかかわらず打撃を続けること。

○まだ準備が整っていない相手に対して打撃すること。

このような行為に関しては観衆からも声上がる。もし当たり前のようにこうした行為が続く場合は、ブクンバルがゲームを中止する。また、プリセアンには、大まかではあるが、いくつかの技術用語も存在する。

○ニェングキワク(Nyengkiwaq)：下から上に向けて脇腹を打撃すること。

○ムムペス(Memepes)：上から下への打撃。

○ベゴート(Begoat)：つま先立ちで歩きながら頭部を打撃すること。

○ニョウエット(Nyowet)：左側から右側にかけて打撃すること。

○ニェレット(Nyeret)：すり足で徐々に進み、相手の正面から打撃すること。

○ンガナキン(Nganakin)：ものすごい速さで2度続けて打撃すること。

○ニャンコン(Nyangkon)：下の方から肘または顎めがけて打撃すること。

ゲームの判定は勝ち、負け、引き分けのいずれかである。判定が宣告され、ゲームが終了すると、選手たちにはブクンバル以外の世話人から金一封や章品が与えられる。賞品はTシャツ、タオル、石鹸、たばこ等々である。賞品を与えることは、ちょうどオランダ植民地時代に終止符を打った頃、すなわち1950年頃からといわれている(Ahmad, 1979/1980)。

V ま と め

本稿は未だ知られざるササク族の格闘技プリセアの全体像を明らかにすることを目的とした。これまで述べてきたことを整理し、若干の私見を加えると、以下ようになる。

1. 防御用の盾エンデは、元は円形であったが、現在は四角形に変化している。攻撃用のブンジャリンは、幾分安全性を考慮した用具に変化している。1960年頃までは、先端にブリキを装着したブンジャリンが使用されていたといわれるから、流血を促すことを優先するよりも、娯楽性の側面が高まってきたのではないかと考えられる。プリセアの技術については、深い考察には至らなかったが、おそらくボクシングその他の近代スポーツの情報を取り入れて、変化してきているとみられるが、ガムラン等の装備については大きな変化はないと思われる。
2. ウェトウ・リマ、ウェトウ・トゥルー、ブダの宗教的相違によるグループによってプリセアの様態が異なるのか。この点に関しては、文献はなく、短期の調査では情報も得られなかった。プリセアを運営・管理する組織（といっても、近代スポーツのように官僚的組織化が成されているわけではない）について見ると、ブクンバルの役割がワシットという審判の導入によって、やや後退したようだが、プリセアの進行上欠かせない存在として、現在も機能している。彼らが持つ呪術は現在もプリセアに生かされている。
3. プリセアは雨乞い儀礼として伝承されてきた。また、超自然的力を試す場としても認識されてきた。しかし、プリセアで超自然的力を試すことは、筆者も実際見たが、雨乞いとしての機能は、乾期以外や、イスラームの祝日等に行われることからして、衰退していることは明白である。ただ、雨乞いとしてのプリセアが消滅したわけではなく、かつて特化していたことが、後におそらくイスラームの浸透、文明社会の情報が入ってきたことによって、徐々に雨乞いに特化したものでなくなったということである。
4. プリセアはまだまだ盛大に行われているとみてよい。都市から離れた周縁部でも、マタラムのような都市部でも憂慮すべき状況にはない。それが証拠に、プリセアは頻繁に開催されているし、都市部では冠大会が開かれているほどであり、他の地方からの来訪者や観光客でにぎわっている。

どこかのある地方でプリセアが行われる時には、やはり他の地方からプリセアをするために人が集まってくるのである。プリセア好きな若者の中には、プリセアを求めて転職する者もいるという。重要なことは、このプリセアは雨乞いの儀礼からゲームに変化してきているが、ササク族特有の文化として、彼らの社会において認識されているということだ。

注 記

- 1) Perisian, Peresean という表記も確認されるが、本稿では最も一般的な呼称およびササク語の辞書(Nazir, 1985)を尊重して、Perisean すなわちプリセアを用いる。また、同じロンボク島内でも、西部ではブランドウンガン(Blandengan)またブラドゥカン(Bladukan)と呼ばれる(Agung, 1980/1981)。
- 2) バヤン郡スカダナ村スグントゥル集落、同カラバジョ集落、タンジュン郡シガル・ブンジャリン村シラ集落、ガンガ郡ベンテック村ロアン・サワック集落。
- 3) 人口約40万。面積約1400km²。住民の大部分はムスリム。島の西側にササク人が居住し、プリセアが行われる(石井米雄, 1994)。
- 4) 16世紀初めからバリ島は8つの王国に分裂。その1つにカラニアスム王国があった。17世紀末からはロンボク島をも支配下においた(Ahmad, 1979/1980)。
- 5) 西海岸のスンギギはいち早く観光開発が進められ、ロンボク島の観光拠点になっている。
- 6) 東カリマンタン州クタイ・カルタヌガラ県トゥンガロンで行われた第4回伝統スポーツフェスティバルには、30州の代表団が出場し、民族遊戯およびスポーツの表演を行った。採点項目の中に、芸術的要素(20点満点)があり、その中に伴奏が含まれている(石井浩一, 2006)。

参考文献

- Anak Agung Gde Putra Agung (1980/1981) Magebug dan Mekare Seni Tari Tradisional di Karangasem Bali, Departmen Pendidikan dan Kebudayaan: Jakarta, pp.18-20, 29-30, 47-48, 52-60.
- Ahumad Yunus, Bambang Suwondo (1979/1980) Permainan Rakyat Daerah Nusa Tenggara Barat, Departmen Pendidikan dan Kebudayaan : Jakarta, pp.37-46.
- 綾部恒雄監修(2000) 世界民族事典, 弘文堂 : 東京, p.277.
- David Pickell (ed.) (1997) East of Bali: From Lombok to Timor, Periplus Editions: Singapore, pp.43-49.
- Departmen Pendidikan dan Kebudayaan (1988) Sejarah Daerah Nusa Tenggara Barat, pp.216-217.
- Hamzuri, Tiarma Rita Siregar (ed.) (1998) Permainan Tradisional Indonesia, Departmen Pendidikan dan Kebudayaan : Jakarta, pp.271-272.
- 石井浩一(2002) キーノートレクチャー: インドネシア民族スポーツ研究の現状と課題, 体育学研究 47-5, pp.476-477.
- 石井浩一(2002) インドネシアの国内植民地主義と民族スポーツ政策, (財)水野スポーツ振興会 2001年度研究助成金研究成果報告書 アジアのスポーツ文化に及ぼした植民地主義の影響, 水野スポーツ振興会, pp.69-70.
- 石井浩一(2003) ムグブの身体技法, 愛媛大学教育学部保健体育紀要 4, pp.70-73.
- 石井浩一(2006) インドネシア伝統スポーツフェスティバルの一考察, 松山大学論集 18-4, pp.25-39.
- 石井米雄監修(1994) インドネシアの事典, 同朋舎出版: 京都, p.186, 456.
- 石川栄吉他編(1987) 文化人類学事典, 弘文堂: 東京, pp.305-306, 651.
- イ・ワヤン・バドリカ (石井和子監訳, 菅原由美他訳) (2008) インドネシアの歴史, 明石書店 : 東京, p.22
- 中城正堯(1988) ロンボク島、ササク族の村むら, 季刊民族学, 12-2, 国立民族学博物館, pp.82-86.
- Nazir Thoir dan lain-lain (eds.) (1985) Kamus Sasak-Indonesia, Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa Departmen Pendidikan dan Kebudayaan : Jakarta, p.209
- Tim Sri Yaningsih dan lain-lain (eds.) (1988) Peralatan Hiburan dan Kesenian Tradisional Daerah Nusa Tenggara Barat, Departmen Pendidikan dan Kebudayaan: Jakarta, pp.21-27.